



込堂 忠男さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：11月16日

避難の間、「こんなにして貰って」と人の温かさを実感したよ

震災前は妻と息子さん、娘さんと孫2人の6人家族で暮らしていましたが、今は今年7月に完成した福島市のご自宅で妻の京子さんとお二人です。それでも、千葉にいても頻りに帰宅する長男や相馬に住む次男、娘さんや孫たちが住む宇都宮から集まり易い福島市の家が良いとおっしゃいます。



▲「やっと落ち着きました。ホッとしています」と妻の京子さん

◆避難所は、寒いなんてものじゃなかった
あの震災が起きた時は、浪江中学校の体育館で卒業式の後片づけをしていたよ。お母さん(妻の京子さん)は迎えに行きた孫と帰宅していた。双葉の薬局に勤めていた娘は山道を通って何とか帰宅して、夜明けには長男も帰って来て、皆無事だった。
停電している上に余震が何度もあり、家族で避難所に行ったけれど、ストローブは1個だけ。トイレの水は出ず、何とかして

くれと周りに言われてもどうにもならなかったし、一晩ここに本当に居れるだろうかと思っただけ。
高瀬にある実家が倒壊し、親戚合せて20人近くが葛尾村の親戚を頼ったよ。その後直ぐに姪が嫁いだ会津若松に避難した。その嫁ぎ先の家は大工の棟梁で、いろいろ手を掛けた広い家だったものだから、26人くらいの親戚が世話になったんだ。炊事や買い出しなどは当番を決めて、夜が明けない頃からガソリンスタンドに並んだりしたな。雪がある生活に慣れていなかったから、10日程で夫婦二人で妹の嫁ぎ先の静岡県伊豆市へ移ったよ。修善寺に一軒家を借りて、小さな畑をしたり、釣りを楽しんだりした。自分で作った「北あかり(じゃがいも)」などを福島市の友人たちに送ると喜ばれたな。
◆伊豆の人たちや地域の応援は、本当に有り難かったよ
私は土木関係の会社や運輸会社の仕事が長かったが、楽しみはもつぱら釣りだった。あちこち行っていたが、中でも南相馬市の真野川の河口に友人がモーター

ボートを係留していて、鹿島の東北電力原町火力発電所の辺りには良く行ったよ。鯉や秋刀魚も釣れて楽しかったな。
修善寺から程近い土肥は、浪江の海にはいない槍烏賊や太刀魚が面白いように釣れる所だったな。家賃は伊豆市から支援を受けて5DKで3万円だったのだから、結局2年7か月世話になったよ。
ただ、伊豆から浪江町に通う時に、車で首都圏を通り抜けるのが何とも億劫だったので、福島に戻る決心をしたんだ。横浜周辺で開催される福島県の避難者交流会にも何度か行ったし、浪江町役場なども時折訪ねて家を探したよ。ようやく福島市森合に見つかり、その後、この家を買うことになったんだ。
町の除染や放射線量の低下は先のことだと思ってるし、家は荒れる一方。孫が訪ねて来られないようでは、浪江に帰って来ないよ。嬉しきことには、この福島市の近所には結構同級生がいるし、妻の姉さんも近くだし、何より子どもたちや孫が来易いのがいいね。

浪江のこころ通信

●第55号●

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から4年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第55号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





根本 昌幸さん(苧宿)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・田村
取材日：12月4日

避難体験者の言葉を伝える

詩人として活躍されている根本さんご夫妻に初めてお会いしたのは、震災のあった2011年9月でした。あれから4年、再びお目にかかってその後の様子などをお聞きました。

当時、相馬市の借上げ住宅と一緒に避難されていたお母様は、残念なことに今年の1月、南相馬市の高齢者グループホームで亡くなられました。そして元気に走り回っていた愛犬のコちゃんは今もう13歳。年月の長さを感じる再会になりました。



▲洋子さんから「こんなに成長した郁弥を見て欲しい」と写真を預かりました



▲根本昌幸さん、洋子(筆名 みうらひろこ)さん

■前回お会いできなかった孫の郁弥君はどうされていま
すか
今回も部活で留守にしており残念ですが、もう中学1年生になりました。
小学校の頃は野球部に所属し、選抜で東北大会まで行ったのに、中学に入学したら親しい友だちと一緒にバレー部に入りました。相馬市立向陽中学校のバレー部は部員が減り、休部か廃部かという危機にありましたが、郁弥ら1年生が6人入りし、今年は新人ながらも県大会に出場しました。
以前の家は浪江の家の景色と

よく似ていて、私たち夫婦は大変気に入っていました。郁弥も慣れたところでしたが、家の契約更新を機に、進学する中学校の学区内に移るため、妻の洋子が懸命に探してこの家を購入し転居しました。
■作詞された「ふるさと浪江」は本当に歌われていますね
2011年に取材を受けた後にレコーディングをしましたがおかげさまでCDが発売されてからは、あちらこちらの浪江の集いや復興祭などで歌って頂いています。
「よく作ってくれた」という感謝の電話や「泣けてくる」という感想も頂きました。作曲された原田直之先生もNHKの番組で歌ってくださってラジオの深夜放送からもこの歌が広まりました。本当に嬉しいことです。
避難された方々がよく歌ってくださるのですが、本当にみなさん嬉しいですね。俳句や歌、料理、手芸など何かすることで苦しい心を前向きに変えていってほしいようにお見受けします。

■2013年暮れに詩集『荒野に立ちてわが浪江町』をお出しになりましたね
浪江町「広報なみえ」にも出版の記事を載せて頂きました。
有り難いことです。
妻も今年の8月に本を出しました。『渚の午後』という詩集ですが、帯は南相馬市に暮らす作家の柳美里さんが書いてくださいました。柳さんにお願ひする際には、浪江の家や「復興なみえ十日市」に案内をしたりしました。
私はこれまで歌の作詞の仕事が多かったこともあり、情緒的な作品を作ってきたように思います。震災と原発事故以降、社会派と言われる作風が変わってきたように思います。東電が引き起こした事故や避難のことなど時代を切り取った作品を今後も作りたいと考えています。
そして前回もお話ししましたが、避難所で1個のメロンパンを4人で分け合ったことなど、逃げて避難をした者だからこそ言葉紡ぎたい、伝えたいと思います。これは妻も同じで、避難者としての視点を持ち続けたいと話しています。
浪江に戻ることに非難は非難はありますが、孫を育てているうちは無理かもしれませぬ。相馬藩士の末裔として先祖代々受け継いできた家や残してきた蔵書には大いに未練がありますが、ここ相馬では近所の方々をはじめ、いろいろな人に恵まれて暮らしています。



鈴木 俊哉さん(川添)

取材者：浪江町役場 鳴原
取材日：12月14日

町の復興を信じて仕事をしています

浪江町役場新規職員として、復興推進課まちづくり整備係で勤務している鈴木さん。生まれ育った浪江のために働きたいという思いで仕事に就き8か月が過ぎました。若き役場のエースにこれまでとこれからの想いをうかがいました。



▲「毎日が勉強」という鈴木さん

震災時は大学1年で福島市のアパートにいました。家族とは連絡がつかず、停電のため津波のことを知ったのは夜になってからでした。両親や隣に住んでいた祖父母の状況がわからず、それこそ生きているかどうかさえわからなかったので心配な気持ちを抱えたまま過ごしました。翌日に連絡が取れた時は、本当にほっとしました。
大学には美術の教師になるつもりで進学し、浪江には戻らないだろうと考えていました。震

災直後、「浪江町は今後二度と住めないだろう」という噂を聞いて、喪失感に見舞われ、その時初めて浪江を故郷として意識したように思います。でも、教えることが好きだったので、当時はまだ教師になる気持ちでいました。その後、中学校に教育実習へ行き実際に教師としての立場に立つてみると、教師は自分に向かないのではないかと悩み、将来の目的を一度失ってしまいました。それから自分は何をやりたいのだろうとじっくり考えました。役場職員になろうと思ったきっかけは、せっかく仕事をすれば自分にとって働くことに意義があることをしたい、地元のために働きたいと思ったからです。そう決意はしたものの、まったく分野が違う勉強をしていたので、もう一度ゼロから勉強をし直し、試験を受けて今年度採用となりました。

4月1日の辞令交付で復興推進課に配属されました。町の復興の役に立てればと思っていた仕事だったので、その目的が一番近くて達成できる課で良かったと思います。仕事は想像していたよりも大変で、仕事量の多さ、終わりの見えない果てしなく続く感じ、今やっていることが陽の目を見るのだろうかとか不安になることも正直あります。でも、町の復興を信じてやっているので、町民の皆さんにはどうせだめだろうと思わずに町をあきらめないでほしいと思います。
自分が浪江町で一番に思い浮かぶのは、自転車で行って来たマリナーパークです。小さい頃はプラネタリウム、小学生・中学生では剣道のスポ少や部活での打ち上げのパーベキュー、また、家族でフリーマーケットに出店したり、イベントでウナギのつかみ取りをしたり。年を追うごとに関わりかたは変わっていきましたが、思い出としてたくさん記憶に残っています。そんなふるさと浪江町の復興の役に立てるように、今は早く仕事を覚えて復興推進課の戦力になれるように頑張りたいと思います。



▲大好評・完売のなみえ焼そば



▲初めてのワークショップも大成功



橋本由利子さん(川添)・鈴木 昭孝さん(権現堂)

取材者：特定非営利活動法人おおむた・わいわいまちづくりネットワーク 彌永
取材日：10月25日

～支援から始縁へ～ あれから5年。私たちは「仲間」になりました

「今年も、東北から仲間が応援に来てくれました！」嬉しい文字が躍る祭りのパンフレット。2011年秋、福岡県久留米市のポレポレ祭りに初めて浪江の皆さんが参加されてから、5回目を迎えます。この間、仲間の輪は広がり・繋がり・深まり続けました。



橋本由利子さん



鈴木 昭孝さん

◆ポレポレ祭りに参加して

橋本 コーヒータイムの仕事として日頃取り組んでいる「ポレポレの糸巻き」を、今回は「ものづくりワークショップ」という新しい切り口で開催していただき、メンバーと共にワクワクしてやってきました。私たちに出来る技術を使って、ワークショップの参加者に楽しんでもらえる。それを間近で感じることは、メンバーにも私にも大きな喜びです。

鈴木 この祭りへのつながりは、橋本さんによるもの。旭屋の仕事でコーヒータイトムさんにお願いでいたご縁から、「一緒に福岡へ行こう。一緒に焼そば、焼こう」と声がけしてもらったんです。今日、何人も「これを食べるために来たんだよ」「本物が食

橋本 今日は子どもの声や笑顔があふれていますね。こんな雰囲気は久しぶり。今住んでいる仮設住宅でも職場の周りでも、子どもの姿はとて少ないの。朝からずっと楽しくて「はい、チーズ」って言わなくても、ほら、いい笑顔でしょ。ね。

鈴木 私は九州の人・全国の人に本物の浪江の味を知って欲しい。B-1グランプリで焼そばによるまちおこしが有名になったでしょ。でも「よし、本場へ食べに行こう」と思ってもらったって、その町がないわけだから。自分たちからイベントに出て行って、浪江が「なみえ焼そば」が消えないようにしたいんです。

橋本 私は九州の人・全国の人に本物の浪江の味を知って欲しい。B-1グランプリで焼そばによるまちおこしが有名になったでしょ。でも「よし、本場へ食べに行こう」と思ってもらったって、その町がないわけだから。自分たちからイベントに出て行って、浪江が「なみえ焼そば」が消えないようにしたいんです。

◆ふるさとへの思い

橋本 私は、子供や孫にふるさと浪江を引き継ぎたい。浪江町をなんとか残したいと思ってるの。いろんな方がおっしゃっているように、「町のこし」ね。目を閉じると、あの山が見える。川の音が聞こえる。花の香りがするのよ。それで、あっちへ行きこっちへ行くの自分の活動が少しでも浪江のお役に立てば、と思ってます。

◆これからのこと

橋本 コーヒータイムは、震災後「たのしいことすっぺ！」をキャッチフレーズに、悩みながらも元気にやっています。それを声高にアピールするのではなく、我々の活動を遠目に見ていただいて、何かを感じてもらえればいいなあ。そうそう、今回の参加をきっかけとして、「ものづくりワークショップ」活動

を事業化したいと考えています。日本中に出かけて笑顔のイベントを通して、障がい者と健常者、そして被災者と震災を知らない方を繋ぎたいですね。
鈴木 もっとなみえ焼そばを大衆化して、日本中でイベントをやりたい。『食べてみる』美味しいう浪江ってどんな町だったんだろうと、関心を持ってもらえるでしょ。今日、「美味しかった」と言ってくれたお客さんも、これからは「浪江」という言葉に反応してくれるんじゃないかな。

◆浪江の皆さんへ

橋本 来年はコーヒータイム開設十周年。現在お借りしている二本松市金色の事務所から、すぐ近所ですぐ移動します。広くなるので仲間も増えることができるし、ボランティアさんにもたくさん来ていただきたい。内装は、木を使って温かい雰囲気になりますよ。完成したら、浪江の皆さん、そして福岡の皆さん、ぜひ、遊びに来てください。ね。
鈴木 来年はここで、浪江町の人に懐かしい焼そばを食べて欲しい。張り切って焼くよ！この味が、ふるさとを離れた人の心に、思い出を蘇らせるんだ。きつと！



北岡さとみ (出会いの場ポレポレ管理者)

当法人は、2011年3月以降、数回に分けて東北支援に職員を派遣しています。この流れの中で「全町民が避難している町の福祉作業所のことを知って欲しい」と、コーヒータイム代表の橋本さんを紹介されたことから、お付き合いが始まりました。当初は「お祭りにご招待して、少しの時間でも震災のことを忘れて元気になってもらいたい」と思っていました。でも今は、「祭を盛り上げて来てくださっている」と捉えていますし、私達が元気をもらっています。この縁をこれからどのように繋げていくのか、あらためて考える時期にきていると思います。

私は震災の年に出産しました。これから先、息子が小学校に入学し、やがて成人式を迎えるその度に、「ああ6年経った。20年過ぎた。あの町、あの景色、今はどうなったのだろう。あの方は、どこで過ごしておられるだろう」そう思うでしょうね。

こちらに避難しておられる浪江町の方々が遊びに来て、懐かしい顔に出会う、新しい友達ができる。ポレポレ祭りが、そんな出会いの場になれたらいいな、と思っています。

～「出会いの場ポレポレ」～

福岡県久留米市に2001年に開所された障害福祉サービス事業所。毎年秋に、誰もが混ざりあい支え合う地域づくりの一環として、地域住民・企業・学校などと連携し、「ポレポレ祭り」を開催。

